「よいリハビリテーション」メタファーとキャリア教育[1]

The "Good Rehabilitation" Metaphor and Career Education

土元 哲平
Tsuchimoto, Teppei

はじめに：リハビリテーション系学生のキャリア発達

リハビリテーション学校（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士養成学校の総称）は、比較的自由に卒業後の進路を決定できる総合大学等と比べ、卒業後の進路が明確である。しかし、理学療法士養成校の学生のうち少なくない者たちが，十分な自己の職業観を省察することなく，近親者や高校教員の勧めにより進学を決めているという実態がある(藤澤, 2018)。こうした中で、学生達のキャリア発達をどのように豊かにしていくかが重要な課題である。原ほか (2020) は理学療法士養成校の学習支援に関する問題点の一つとして、「学業成績及び資質及び適性向上を主目標として実践される中で、多くは学習結果のみを重視する成果主義に傾きがちなこと」があるという。つまり、学生のキャリアの成功が、ある側面では「国家試験に合格したか否か」で判断されることになる。こうした状況は、リハビリテーション学校に限られたものではないだろう。

個人のキャリアや職業観は、試験の合格といった外的な指標によって評価できるものではない。D. E. スーパーは、キャリアを「生涯の過程を通じて，ある人によって演じられる諸役割(roles)の組み合わせと連続」(Super, 1980, p. 282) と定義している。学生のキャリアを理解するためには、国家試験合格のような外的な目標というよりもむしろ、学生が入学以前から育んできたリハビリテーション（職）に対する意味づけや経験を理解する必要がある。しかし、リハビリテーションを学ぶ学生が、どのように自らの目指すキャリアや職業を捉えているのか、その理解を深めるためにはどのような教育方法が有用なのかといった点は、これまで十分に検討されてこなかった。そこで本稿では、リハビリテーション系学生のキャリア発達を促すために筆者が実施したワークの分析・考察を行う。

方法

メタファーとは

本稿では、メタファーで自己の経験を表現するワークを分析・考察する。したがって、まずはメタファーとは何かについて説明する。メタファーとは、簡潔にいえば「たとえ」であり、「ガラスの心」といった例が挙げられる。メタファーの機能としては、あるもの（心）を別のあるもの（ガラス）**として** 理解することにある。つまり、メタファーを用いるためには、2 つのものが物理的、身体的に離れていること

[1] 本稿は、日本質的心理学会第 16 回大会発表（2019 年 9 月、於：明治学院大学）におけるポスター発表「メタファーによる自己表現と職業的アイデンティティ発達：リハビリテーション学生のワークから」（著者：土元哲平・サトウタツヤ）をもとに加筆修正を行ったものである。

が前提になる。例えば、「ガラスの窓」はメタファーにはなりづらいが、「心の窓」はメタファーとして捉えられる。窓とガラスは、物理的に近い関係にあるし、私たちがそのことを疑うことは稀である。一方で、私たちは、窓が心から作られていることはないと考えているので、「心の窓」という表現はメタファーであると理解できる。つまり、メタファーは、私たちが日常で用いられることばや、世界についての認識に深く関係している。メタファーは、人々が現実を理解する上で用いられる概念体系の本質的な基盤をなしており、日常的な行為の理解には、理論のような抽象的概念よりもメタファーによる理解が適しているとも言われている (Lakoff G. & Johnson, 1980; ガーゲン, 1998)。

厳密には、私たちの言葉はほとんどがメタファーから構成されている。例えば、「お腹がいっぱいだが、朝ご飯を食べた記憶がない」という語りがあったとすると、「お腹がいっぱい」は、お腹という身体の一部分を、容器や入れ物のような「蓄える（保存する）空間」として理解している。「記憶がない」という表現も同様である。付言すれば、記憶を「蓄える空間」のメタファーとして捉えることは、ソクラテスにまで遡ることができる。ソクラテスは、知識を保有（possessing）することを鳥小屋に鳥を持っていることに、知識を所持（having）することを自分の手に鳥を持っていることに喩えて、潜在的に覚えていることと実際に覚えていることとの違いを表現した(Draaisma, 2003)。ただし、興味深い点は、このメタファーは、単に「蓄える」ということだけではなくよりダイナミックなものを含んでいることである。鳥（知識）が逃げ出してしまう、餌を与えなければ弱ってしまう、鳥（知識）があまりにも多すぎると区別することが難しくなってしまう……というように、読み手が様々に「メタファーの世界」ともいうべきものを想像することができる。

実施したワークと分析方法

分析の対象となったのは、心理学の概論講義の受講生であった、リハビリテーション系学生 167 名であった。これらの受講生に対しメタファーを生成するワークを実施した。具体的には、心理学の概論講義の初回において、メタファーとはどのようなものかを説明した後に、30 分程度時間を設け、受講生自身に「よいリハビリテーション」のメタファーを考案するように促した。その際、「メタファーの作り方ガイド」を紹介した。

表 1　メタファーの作り方ガイド

1.	具体的な経験を思い出してみる。
2.	経験全体をイメージする（○○な感じ）
3.	似ているものに置き換える
4.	どう似ているかを考える
5.	細部を考える
＋α	イラストや図を描いてみる

「メタファーの作り方ガイド」は TAE ステップ(ジェンドリン, 2004)を参考に作成したものである。具体的には、まず「よいリハビリテーション」のフェルトセンス（意味感覚）に注意を向けるために、TAE ステップのステップ 6 前半(フェルトセンスの実例を感じる)を行った（手順 1)。そして、自分の感覚全体を一言で「○○な感じ」と表現する（仮マイセンテンス）一文を作るように促した（手順 2)。なお、マイセンテンスとは、個人のフェルトセンスを凝縮した一行詩風の短文であり、作った本人や共感する他者の意味感覚を呼び起こすことを通じて、思考や行動を方向づけるものである(TaeJapan, 2015)。(川喜田,

1967)その後、手順 3 から 5 において、自らのフェルトセンスを、似ているものと対応付け、メタファーとして精緻化するようにした。手順 5 でいう細部とは、上述したことばの使用群を指している。「よいリハビリテーションとはゲームである」というメタファーを考えたとしたら、ゲームの種類、登場するキャラクター、BGM、…といったものと、リハビリテーションとの関係を考えるというようなステップであった。これは、二次的メタファー(ガーゲン, 1998)の生成であるともいえる。

ワークは 2 人ペアで取り組むように指示し、創出するメタファーの数は制限しなかった。結果的には、1 人あたり 1 つから 3 つのメタファーを考案した受講生が多く、計 179 個のメタファーが生成された。このうち研究利用不可、判読不能のものを除き、計 168 個のメタファーを分析対象とした。具体的な分析手法としては、まず受講生の記述を丁寧に読み、データを文字起こしした。

その後、KJ 法(川喜田, 1967)を参考に、ボトムアップ的にカテゴリを生成した。ここでは、受講生の記述したメタファーの記述同士で意味が類似する記述をまとめ、その意味のまとまりを示す表札（ラベル）を付けた。これを小カテゴリとした。次に、その小カテゴリ同士で類似するものをまとめ、表札を付けた。これを大カテゴリとした。最後に、大カテゴリ同士の関係を空間配置した。

倫理的配慮

他人に語りづらいこと、個人情報等は記述しないよう指示をした。また、論文・研究・教育等への利用について説明し、掲載を希望しない場合は指定箇所に×印をつけるように受講生に指示をした。×印がついているものに関しては分析から除外した。

結果と考察

メタファーの具体例

メタファーの記述の具体例としては以下のようなものがあった。（それぞれの例について、【大カテゴリ/小カテゴリ】の順に記載している。）

- ブランコ→頑張って続ければその分，成果がでる所が同じかなと思ったし
  昔，自分がブランコに乗った時，お母さんが背中を押して助けてくれた様に自分も患者さんの手助けが出来たらと思うから。【回復への努力/努力】

- 「よいリハビリテーション」は「鯉のぼりのようなもの」である。
  風(PT)　鯉のぼり(患者)　例：下半身麻痺
  治療なし(無風)→ケガ，病気で体が動かない(垂れ下がっている)
  小回数の治療(弱風)→部分的に動かせるようになる(尾の部分が少しなびく)
  中回数の治療(中風)→補助があれば立てるようになる(全体が持ち上がってなびく)
  高回数の治療＝完治(強風)→歩けるようになる(しわなく，ピンと張ってなびく)
  PT は風であり，風の向き，強さ次第で鯉のぼりである患者を元気よく，美しく，見せることができる。【可能性/美しさ】

- 良いリハビリテーションとは，囲碁である。自分が出した一手(案)を相手がそれについて一番いい一手(案・行動)で返してくれる。そのときは自分も相手も自分のこと　お互いのことについて考えている。今，いっている所(問題)が終わる(解決する) と新しい場所(問題)にとりかか

る。自分が終わったつもりでも相手が次の一手でまだ残っている所を教えてくれる。すべて打ち終わるとその局面(リハビリテーション)の終了である。このような患者さまと療法士の応答である。【協力的関係/二者関係】

- 良いリハビリテーションとは　型にはまらない白の人間だと思う。サポートする相手は老若男女で誰にでも寄り添えて，少しブルーで暗い心をやわらかくできて，暗い色を明るくできる白色のものだと思います。【明るさ/明るさ】

KJ 法を用いた分析

以上のようなメタファーの意味に注目して、まず、KJ 法を用いてその意味の構造をカテゴリ化した（表2)。ここで興味深い点として、2 点挙げられる。第一に、同じメタファーの素材やモチーフであっても、人によって意味づけやその細部は様々であったという点である。例えば以下の 2 つは、いずれも「二人三脚」というモチーフを用いているが、それぞれ異なるリハビリテーションの側面が描かれている。

- 僕は指を手術し，リハビリを受けたことがある。手術後は指が腫れ，まったく動かなかった。もう一度動かすために，リハビリの先生と二人三脚で取り組んだ。
  それは，母と自分が産まれたての赤ちゃんのようだ。初めての手術を受け，何をどうすれば良いかわからず，言われるがままにリハビリに取り組んだ。母も子に，初めは言葉やご飯の食べ方などのように分かりやすく，見方を見してもらいながら行った。
  少しずつ動くようになり，自分でもやり方がわかってきたら，物事を覚え始め，ぎこちなく言葉を発したり，良い悪いわからず，思うがままに遊ぶように自分自身でリハビリを行うこともふえた。完治はしなかったが，治ったときは，言葉を発し，通じたときのように嬉しかった。【協力的関係/二者関係】

- 「二人三脚」
  私は実際にスポーツのケガで理学療法士の先生にリハビリを受けたことがあります。
  先生の「一緒に頑張っていきましょう！」から始まり，リハビリメニューを一緒にこなして成功を一緒に喜び，治療だけでなくスポーツが長い間できない私の，不安や焦りの気持ちを聞いてくださり，心のケアもしてくださりました。
  体育祭でよくする競技の“二人三脚”は，自分の力だけではゴールできないし，二人で協力して，失敗したら「次がんばろ！」「どんまい！」って励まし合って 1 つになって上達していくから，リハビリも患者さんとコミュニケーションをとって一緒にがんばっていくから「二人三脚」にたとえました。【協力的関係/二者関係】

第二に、類似するリハビリテーションの側面が、異なるメタファーの素材を用いて描かれていたということである。例えば、【吸収/吸収】に属する以下の 2 つのメタファーがあった。

- …自分が思うメタファーは日焼けだと思います。太陽の光を肌が吸収するというところで紫外線が肌にあたることで肌が次日焼けするとき強くなります。そこを PT とリンクさせると患者さんがかかえている不安や悩みを PT が聞いたり同じ目線にたつことで患者さんも不安を解消することもでき，自分も強くなると思います。【吸収/吸収】

- メロディーのような声掛け
  理由→試合前に怪我をして，その時に PT さんが「気持ちで勝てる」と言われて，その言葉が頭にすっと入ってきたから。簡単にできる(声掛けだけど)リハビリ。【吸収/吸収】

表 2. メタファーの意味のカテゴリ

大カテゴリ	小カテゴリ	生成されたメタファーの例
方法の適切さ	工夫	料理
	組み合わせ	料理
	適切さ	ギター、食事、お菓子作り、パズル、多面ディスプレイ、家を建てる、LED、焼肉、ガーデニング、お片付け
	なじむ	革靴
知識	知識	料理
相互理解	受け入れる	個性、キャッチボール
	相互関係	サトシとピカチュウ(ポケットモンスター)、 やかんとコップ
循環	循環	太陽光パネルと電気
創造	創造	白いキャンバス
	作る	建築家
ゴール	ゴール	航海、山頂
向上	向上	勝ちたい試合の試合前のチームの雰囲気、整形、植物、数字
	上昇	ひまわり
	上達	歌唱レッスン、ピアノを弾くこと
	成長	植物、マラソン選手
	前進	車
	育てる	花、園芸、農業、木
	飛躍、飛ぶ	たんぽぽ、跳び箱、チョウチョ
協力的関係	教える	学校
	コミュニケーション	部活
	支える、助ける	心のつえ、家の柱、騎馬戦、赤ずきん
	信頼	他者との信頼関係を築くこと、よろずや
	好き嫌い	食べ物と飲み物と人の関係
	他者の必要性	スポーツ、大工さん
	チーム・協力	バレーボール、サッカーの試合、団体戦、構造物、野球、サッカー、キャッチボール
	二者関係	キャッチボール、囲碁、さくらんぼ、二人三脚、シーソー、鳥、発明家とロボット
	平等さ	みんなの太陽、凸凹の平衡
	寄り添う	寄り添うこと
吸収	吸収	根、メロディーのような声かけ、日焼け
基礎	基礎	組体操、ドラム缶の底
感情や思い	笑顔	お笑い芸人、太陽のような笑顔
	感謝	ありがとう生産機、天気
	楽しさ	だんじりできれいにやりまわしが決まった時
	喜び	テストを一夜漬けして終わった後の長時間の睡眠
	リラックス	家、ベッド
可能性発見	可能性	着火剤、物事に成功した体の豆、 鯉のぼり
回復への努力	回復の地道さ	木の枝、屋上へと通じる階段、勉強、野菜作り
	継続性	食生活、薬
	努力	植物を育てること、スポーツ、階段、ブランコ、やりなげ
改善	治す	ボンド、雑草、壊れたシャーペン
	日常復帰	リフォーム、添え木
明るさ	明るさ	型にはまらない白の人間
	輝く	誰からも信頼されて輝いている人、輝いている太陽、太陽、懐中電灯、ダイヤ、月光、星、てらす光、希望の光
変化	変化	人生、木

カテゴリの空間配置

次に、上記の表 2 のカテゴリについて、空間配置を行った（図 1）。ここでは、生成されたカテゴリを、「主体性 - 関係性」「支援の適切さ - 状況の向上」という 2 つの次元で整理することを試みた。これは、「よいリハビリテーション」をメタファーによって描く際に、異なる描き方が見られたからである。第一に、リハビリテーションを行う主体（患者・療法士）について、“患者が主体的に回復、可能性、向上に向かっていく”側面を描くのか、“患者と療法士とのよい関係性”（協力的関係、相互理解、感情や思い）の側面を描くのか、という違いがあった。第二に、実際にリハビリテーションの対象となる障害、ケガ、病気等が、どのように変化（改善）したかという観点から、「支援の適切さ」や「状況の向上」が描かれた。

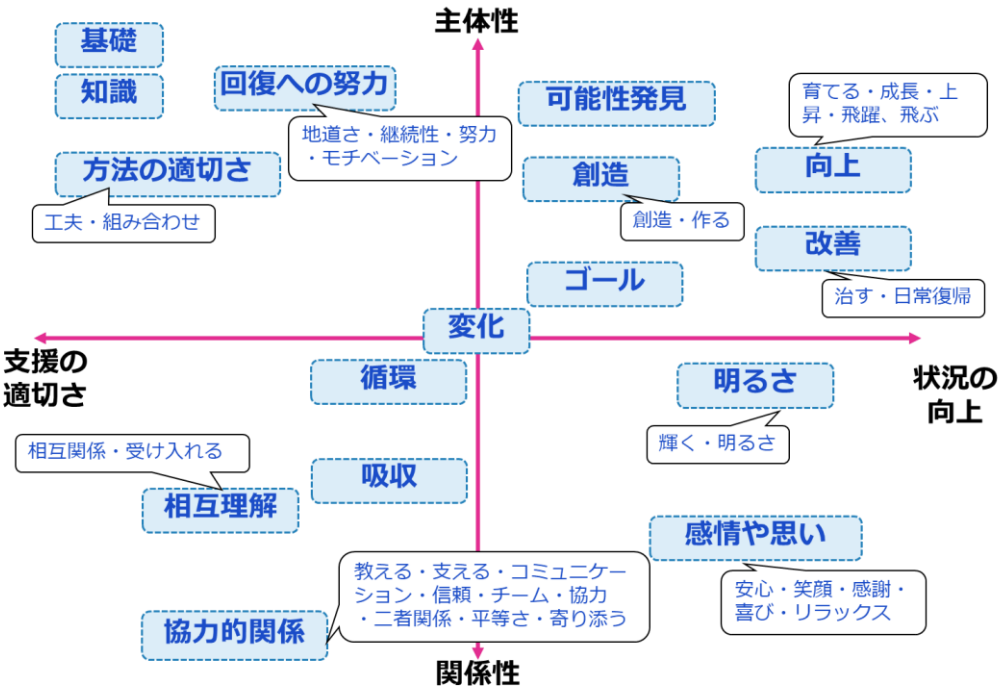

図 1. 生成されたメタファーの構造図

総合考察

本稿では、メタファーを用いたワークの分析を通して、リハビリテーション系学生の持つ「よいリハビリテーション」のあり様を明らかにした。メタファーを用いることで、彼らがどのように自らの目指すキャリアや職業を捉えているのかが明らかになった。

哲学者・臨床心理学者であるジェンドリンの論考 “Crossing and Dipping”(Gendlin, 1995)においては, メタファーの機能は、ある「状況」と「ことばの使用群」との**交差**であるとされる(岡村, 2015)。“ガラスの心”という語が持つ**使用群**には、例えば、透き通った、割れやすい、傷つきやすい･･･といったものがある。これらの使用群が、“ガラスの心”というイメージを喚起することになる。この使用群は、社会に比較的共通のものもあれば、個人によってユニークなものもある(土元ほか, 2020)。土元ほか (2020)は、自己の主観的感覚やことばを他者に伝える媒介として、メタファーを位置づけている（図 2）。その研究

では、オートエスノグラフィー[2]の試みとして、「成長の瞬間」（転機によって人が成長する瞬間）における「よいキャリア支援」という身体感覚を言語化・メタファー化する実践を行った。メタファーを用いた理由は、「よいキャリア支援」やそこで被支援者が感じた経験を、できる限り豊かなイメージとともに他者に伝えるためであった。土元ほか (2020) は、メタファーで自己の主観的感覚を他者に伝えることの意義について次のように述べている。

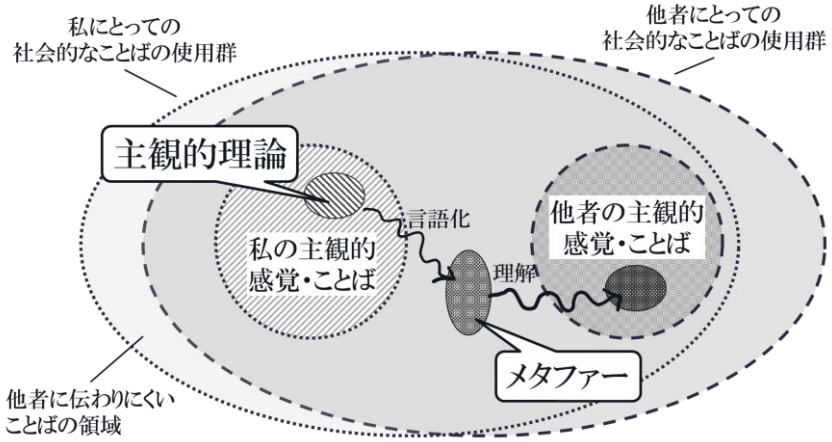

図 2. メタファーによる主観的感覚の理解過程

> 他者と身体感覚を共有できるようなメタファーとして感覚を表現していくことは、他者と共にキャリア支援の経験を交差させ、豊かにしていく上で重要である。……様々な経験をした他者が、自らのフェルトセンスをもとに類似するテーマで研究を行えば、キャリア支援における感覚は、いくつかの経験の「交差」によって、より多くの側面を描くことができ、豊かな意味を含むようになる。 ……身体経験に基づきながら、他者と協同的にキャリア支援のあり方を考えていくことが、主観的感覚に基づいたキャリア支援研究として新しい価値を生み出す可能性を秘めていると考えられる。(土元ほか, 2020)

つまり、自分自身の感覚を表現するメタファーを創造し、それを他者と交差することによって、「主観性」を大切にしながら他者が持つキャリアについての感覚を理解する可能性が開かれるのである。本稿で扱ったワークにおいては、多くの受講生が、メタファーとともに自らの受けてきたリハビリテーション経験を語っていた。メタファーを介すことで、直接的に「あなたのリハビリテーションに対する考え方を教えて下さい」と尋ねるよりも、より質的に豊かな語りが得られることが示唆される。さらに、ワーク時には、2 人組で経験を共有する時間を設けていたため、メタファーの生成過程においても、語りを通した他者の経験との交差がなされたと考えられる。以上から、本稿のワークは、受講生が他者と自分にとっての「よいリハビリテーション」観を交差しながら、自らの感覚を深めていく可能性を有していると考えられる。

さて、キャリアは必ずしも職業的側面のみを指すものではないが、自分が目指している職業をどのように理解するかは重要な点である。そこで、職業的アイデンティティについて考えてみたい。嶋津 (2017)

[2] オートエスノグラフィーについては、第 3 回連載を参照。

は、第二言語学習者のアイデンティティについて、1）社会や他者との関連において形成される、2）複合的で多面性を持ち、過去・現在・未来と常に変化するものである、3）自分自身に関する個人の感覚や意識である、という特徴を持つものとして捉えている。また、アイデンティティは「対人関係、場面や状況、話題などに応じて交渉されるものであり、**言語を通して**構築される多面的なものである」(嶋津, 2017, p. 3; 強調は筆者)。アイデンティティの構築には、個人の感覚やことば、そして他者が不可避的に関わっている。したがって、これまで自分が職業を表現する際に用いていたことばを、メタファーによって新しく表現することは、職業的アイデンティティのあり方を問い直したり、再構成することにも結び付く可能性がある。とりわけ、他者と協働でメタファーを考えることで、それぞれの感覚の交差が生じ、職業について語る際の新しい感覚やことばが生み出される可能性がある。

最後に、筆者は、メタファーには私たちが日常的に用いる「常套的な」(Lakoff G. & Johnson, 1980)ものがある一方で、「**生成的な**」(ガーゲン, 1998)ものもあると考えている。生成的能力とは、社会の前提そのものを疑い、現代の社会生活そのものを疑い、「当たり前」とされていることを疑い、そして、その結果、社会の中に新鮮な代替案を生み出す能力である(ガーゲン, 1998)。例えば、リハビリテーション職は、時としてネガティブな職業と捉えられることがあるが、「鯉のぼりのメタファー」は、リハビリテーションというものに含まれる美的な側面（患者さんを美しくみせる）を強調するものであり、新しい価値を生み出す生成的な力を秘めている。それでは、生成的なメタファーと常套的なメタファーとの境界はどこにあるのだろうか。この論点は、筆者自身も十分に言語化できていないところであるが、ジェンドリンがいうところの「フェルトセンスから語る」「エッジで思考する」(ジェンドリン, 2004) という考え方に鍵があると考えている。他者のことばをそのまま借りたり、表面的な言い回しを用いるのではなく、自分の身体感覚（フェルトセンス）に基づく新しいことばで語ることが、他者、ひいては社会に共有されている既存の価値観を問い直すことにつながるのではないかと考えている。

引用文献

Draaisma, D. (2003). 記憶の比喩: 心の概念に関する歴史 (P. Vincent・岡田圭二, 訳). ブレーン出版.

Gendlin, E. T. (1995). Crossing and dipping: Some terms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and machines*, *5*(4), 547–560.

Lakoff G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. University of Chicago Press.

Super, D. E. (1980). A Life-span, Life-space Approach to Career Development. *Journal of Vocational Behavior*, *16*(3), 282–298. https://doi.org/10.1016/0001-8791(80)90056-1

TaeJapan. (2015). TAE とは何か. http://www.taejapan.org/what_tae.html

ガーゲン K. J. (1998). もう一つの社会心理学──社会行動学の転換に向けて (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀, 監訳). ナカニシヤ出版. (Gergen, K. (1994). Toward Transformation in Social Knowledge (2nd ed.). SAGE.).

ジェンドリン E. T. (2004).「TAE（辺縁で考える）」への序文(村里忠之・村川治彦, 訳). (Gendlin, E. T. (2004) Introduction to “Thinking At the Edge”. The Folio, 19, 1–8.). http://previous.focusing.org/jp/tae-intro.html

岡村心平. (2015). Gendlin におけるメタファー観の進展. 臨床心理専門職大学院 紀要, *5*, 9–18.

原賢治・丹羽敦・角田孝行. (2020). 理学療法士養成課程の初年次におけるキャリア発達支援の重要性. 日本リハビリテーション教育学会誌, *3*(4), 80–89.

川喜田二郎. (1967). *発想法*. 中公公論新社.
土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ. (2020). 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚――TAE ステップを用いた理論構築. 質的心理学研究, *19*, 46–67.
嶋津百代. (2017). アイデンティティについて語るためのことば: 外国語学習環境の日本語学習者によるディスカッションの考察. 関西大学外国語学部紀要, *17*, 1–16.
藤澤宏幸. (2018). 理学療法士養成校教員として学生のキャリア形成にいかに関わるか. 理学療法の歩み, *29*(1), 21–26.

謝辞

本講義に参加して下さった受講生の皆様に感謝いたします。

バックナンバー

- 土元哲平. (2021). へき地小規模校で学ぶ意義について考える：「オートエスノグラフィックな発達」概念を手がかりに（キャリアと文化の心理学（6））. 対人援助学マガジン. 47. pp. 273-275. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/51.pdf
- 土元哲平. （2021）. 職業指導からキャリア教育へ（キャリアと文化の心理学（5））. 対人援助学マガジン. 46. pp. 278-281. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/45.pdf
- 土元哲平. （2021）. 小学校におけるキャリア教育：「役割」を介したオートエスノグラフィックな発達（キャリアと文化の心理学（4））. 対人援助学マガジン. 45. pp.318-322. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol45/52.pdf
- 土元哲平. （2021）. オートエスノグラフィーの特徴と主流の方法論（キャリアと文化の心理学（3））. 対人援助学マガジン. 44. pp.261-263. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol44/51.pdf
- 土元哲平. （2020）. 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー（キャリアと文化の心理学（2））. 対人援助学マガジン. 43. pp.287-299. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol43/52.pdf
- 土元哲平・サトウタツヤ. （2020）. 教育・発達心理学とキャリア教育の接合（キャリアと文化の心理学（1））. 対人援助学マガジン. 42. pp.288-303. https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol42/51.pdf